

名誉会員

井上 博愛 先生

逝く

弔 辞

本会名誉会員の井上博愛先生は令和3年3月21日にご逝去されました(91才)。誠に残念で哀悼の情に堪えません。

井上博愛先生は本学会において、昭和46・47年度庶務理事、50・51年度渉外理事、56・57年度理事・関東支部副支部長、58・59年度理事・関東支部長、さらに63年度理事・副会長を歴任されました。またその間、52・53年度英文誌編集委員長、54・55年度和文誌編集委員長を務められるなど、本学会の発展に多大のご貢献を賜りました。

井上先生は反応工学、特に反応器の熱安定性、固体触媒反応装置設計、気泡塔、酸化窒素系反応吸収塔、非晶質触媒、膜分離、酵素工学、工業反応速度の分野で多くの顕著な業績を挙げられ、学術の発展に多大なご尽力をいただき、その功績により平成元年度化学工学会学会賞を受賞されました。また研究室からは産業界、学界に数多くの人材を輩出されました。

これらのご貢献に対して、平成7年3月に化学工学会名誉会員に推戴されました。

ここに私は、本会の名において、氏のご冥福をお祈り申し上げ、その偉大なご業績に対し、心から尊敬と感謝をささげ、謹んで弔辞を呈します。



ご略歴

昭和4年6月11日生まれ。昭和27年東京大学理学部化学科卒業。同大学院を経て、昭和32年7月同学理学部助手に就任、33年8月理学博士。同年10月に工学部に移動し、昭和36年4月講師、38年4月助教授、45年1月教授に昇任。平成2年3月に東京大学を定年退官、同学名誉教授になりました。同年4月創価大学生命科学研究所教授、平成3年4月に新設された同学工学部教授に就任。平成17年3月に創価大学を定年退職、同学名誉教授になりました。

令和3年4月23日 公益社団法人 化学工学会
会長 石飛 修

井上博愛先生を偲んで

小宮山 宏

半世紀以上も前に受講した井上先生の反応工学の講義を、昨日のこのように思い出します。化学工学科に進学し、それまでの数学、化学、物理といった慣れ親しんだ講義から、単位操作といういかにも工業設計的な講義内容に変わり、なかなかじめずにいたのです。それが、化学反応装置をモデル化し、数式を駆使してその設計をおこなうという反応工学を斬新に感じたのでした。

確かにそれはそうなのですが、振り返って思うと、真摯に歯切れよく、冗談を言われるでもなく、若々しくさっそうとした先生の講義スタイルに魅了されたということも、多分にあったように思われます。先生は当時助教授で、今計算してみれば35歳の若さでした。卒業論文の研究室を選ぶ際には、迷わず井上研にしました。

運動部の学生だった私にとって、秋のシーズンが卒論と重なるというのが悩みの種でした。そこで先生に、夏休み前に前倒しで実験ができないかと相談したところ快諾いただきました。そして、言われるままにおこなった実験で、生まれて初めて、学問的好奇心にワクワクと心が震えるという経験をしました。これこそが私が研究者の道を歩むことになった、たった一つの理由だったので。先生には、いくら感謝してもしきれません。

工学部5号館721号室は、実験室兼4～5名の居室。昭和45年に教授に昇進、教授室に移られるまで、先生はここにデスクを構えておられました。私も一員に加えていただき、ガラス細工から文献調査の仕方まで、文字通り研究のイロハから教わりました。

思い出は尽きません。数学を勉強しようということになり、先生が理学部物理の博士課程の大学院生を、いわば家庭教師として雇ってくださり、同級生の並木君と私、それに先生の4人で、毎週1回、寺澤寛一著「数学概論」を輪講したのを懐かしく思い出します。なんともぜいたくな教育を受けさせていただいたものです。

井上先生は化学工学科の教員ではただ一人、理学部のご出身でした。昭和32年に理学部の助手に就任、10月に工学部に移られました。この間の事情は存じませんが、化学工学科の設立直後のため、教授陣も機械工学や航空工学の出身など、化学工学科の出身者はおられなかったわけです。

が、学際を旨とする学問ですから、工学部でない理学部化学から参加された先生に対する期待は、極めて大きなものがあつたわけでしょう。

その後、学会誌の編集委員会の委員や委員長を数々務められました。和文誌、英文誌、編集全体の委員長、また当時協会賞と呼んだ学術的業績を表彰する委員会の委員長など、化学工学会の学術面での主要ポストのほとんどすべてを務められたと記憶しています。もちろん、関東支部長や学会副会長などの要職にもつかれましたが、学術でのけん引が先生の本領であり、ご自身の好みでもあつたように思います。

先生はよく「大学は多くの人のものなんだよ」と言われました。研究室は、普段は知的でおだやかな場でしたが、学会の締切が迫ったりすると、泊まり込みや徹夜、さながら戦場ようになります。早く帰ろうとする人などに激しい非難の目が向けられたりする中、先生は寛容でした。確かに考えてみれば、さまざまな事情を抱えた人たちの集まりであるのは、どこの社会でも当たり前、締切前の研究室だって例外ではないわけです。インクルーシブな社会、今では標語のようになった概念ですが、先生はそれを先駆的に理解しておられたように、今になって思います。多くの人に愛された所以の一つでしょう。

去年はコロナ禍があつて、ずっと続いた「井上先生を囲む会」が中断に追い込まれました。それまで、はじめのころは本郷界隈で、やがて先生のお宅に近い吉祥寺で、毎年、多くの卒業生が集まりました。先生の御人徳のたまものでした。

昨年11月、私は日経新聞の私の履歴書という欄に1か月連載させていただきました。それは、これまであまりしてこなかった過去を振り返る機会になり、先生への感謝の思いを新たにいたしました。連載が終わり、ひと月分をコピーして先生のところにお持ちしようと考えておりましたところに、突然の訃報です。結局、直接お礼を申し上げる機会を逸し、コピーは奥様にお送りすることになりました。

井上先生ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。